



議会が発信、社労士の出前講座、やっぱり活用できたね。

井口亮一が問う

ブラックバイト等から守る術を

Q 昨年12月に東中学校で開催された社会保険労務士会による出前講座。対象の学年や授業の位置づけ等は。

A 学校教育課長 第3学年全員を対象とし、「働くことの意義とルールや心構え」「知らなかったとならないために」「働くことは生きることと社会保険」のテーマで、社会科公民の授業の一環として開催しました。

Q 教育委員会は校長会等の機会を通じて、今出前講座の評価や情報共有は行なったか。

A 学校教育課長 外部の専門家による授業は、より実社会に即したものであり、生徒にとっても教員にとっても大変有意義なものであったと捉えています。教育委員会としては、校長から授業の様子や評価について報告を受けています。また、中学校長及び小学校長にも報告・説明がされ、出前授業について情報の共有が図られています。さらに今後は、この取り組み効果の検証を行なっていきたいと考えています。

Q 今後、このような出前講座を活用していくか。

A 学校教育課長 今回の社会保険労務士会による出前授業は、各中学校に対して教育委員会から情報提供し、実現した先進事例です。引き続き、働きかけしていきます。



ブラックバイトなどから「若者を守るために」と開催された出前講座。



我が町の魅力を上手に活かした移住・定住施策を。

戸口 勝が問う

住みたい住み続けたい町を

Q 「移住サポートセンター事業」だが、2年間の取り組みの振り返りを。また、平成30年度からは担当課が変わることだが。

A にぎわい創出課長 担当として積極的に関わりましたが、全てを受けとめることができない状態でした。今後は、移住につながる発信力を高め、子育てや農業分野と密接な連携をする中で、それらをフィードバックする体制の構築を望みます。

Q 移住・定住の関係各課と、移住サポートセンターが一堂に会する会議体は。

A にぎわい創出課長 現状は、にぎわい創出課との連携でとどまっていますが、新たに担当する政策推進課において、移住サポートセンター職員と関係各課が一堂に介する場を設ける予定です。

Q WEB検索の充実等、「移住行動」につながる新たな取り組みは。

A にぎわい創出課長 平成29年度は「埼玉ではじめる農ある暮らし」について、移住の取り組みは実現できませんでしたが、平成30年度は各課連携をして実施できればと考えています。また、町ホームページと移住サイトとのリンクは、有効であると捉えています。町の印象・魅力の一つに「農業」があるので、新たに旧下里分校を移住の情報発信・相談窓口として活用する予定です。



移住・定住、雇用、子育ての安心できる環境整備を。(改修された旧下里分校用務員棟)



町の景観づくりに、地域の皆様の協力が不可欠です。

田中照子さんが問う

和を大切にしたい町並みづくりを

Q 当町が「県の景観モデル地区」に選定されたが、その背景は。

A 都市政策課長 昨年7月に県内8地区目として、駅南側の市街地が「和紙のふるさと・商都小川町」景観モデル地区に選定されました。理由は、現存する町家や洋館、蔵など良質な建物が魅力的な景観形成をしていることや、NPO等の市民団体が景観づくりに積極的に活動していることが認められたものです。

Q 選定記念として実施された「まち歩きと講演会」の実績等は。

A 都市政策課長 まち歩きは、定員20人が参加し、講演会は81人の参加がありました。講演会は、建物所有者に対する内容で、「資産活用により将来の安心を得られ、町にもにぎわいが生まれる」という提案ができたと考えています。参加者からは、「町の歴史や身近な景観資源がたくさんあることを知った・身近なところから景観づくりに取り組みたい」などという意見がありました。

Q 選定され、町としての今後の取り組みは。

A 都市政策課長 今後は、モデル地区の景観形成のルールづくりを目標に、研究会の発足や勉強会、まち歩きやイベントをNPO等と共同で継続していきたいと考えています。



資料は県・町・NPO等の3者共同。官民連携は、1+1が10の力です。

Mini Column

オガワマチのことギカイのこと
一緒に見よう、考えよう
「小川町に必要なもの」



駅前ロータリーの大渋滞を解消してほしい。

(N・Tさん・40代)



特にはない。けっこう住みやすいし、不便は感じていません。

(M・Mさん・32歳)



和紙マラソンにフルマラソンの部を設けてほしい。

(K・Kさん・40代)



大学や専門学校の誘致をすべきでは。

(O・Yさん・43歳)